



仲村 亜寿実

*Asumi Nakamura*

福岡県出身(西南女学院高等学校卒業)。武蔵野音楽大学大学院音楽研究科博士後期課程(研究領域:器楽)を修了し、博士号を取得。武蔵野音楽大学卒業演奏会、同大学新人演奏会、同大学院修士による研究演奏会、第76回読売新人演奏会、第7回日本ピアノ調律師協会新人演奏会等に出演。武蔵野音楽大学管弦楽団、東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団のソリストとして共演。同大学ウィンドアンサンブルのアメリカ研修旅行に参加し、シカゴにおけるMidwest Clinic等、各地での演奏会に出演。外務省所管平成18年度日露青年交流事業「日露学生フォーラム」の音楽代表としてモスクワに派遣。「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン2011」の特別展において演奏。第4回九州音楽コンクール最優秀賞、第11回日本クラシック音楽コンクール全国大会入選、練馬文化センター第22回新人オーディションにおいて優秀賞等を受賞。Musicalta 2006(仏)、Salsomajjore Masterclass(伊)、Umbria Estate 2009 & 2011(伊)等、海外でのマスタークラスを受講し同音楽祭に出演。平成16~19、23年度福井直秋記念奨学生。

ピアノを堤まり、山廣絢子、堺康馬、イエネ・ヤンドー、エレナ・アシュケナーの各氏に、ピアノ伴奏法を故ヤン・ホラーク氏に、室内楽をクレメンズ・ドル氏に師事。2010年より、明治学院大学心理学部教育発達学科特別TAを務める。現在、武蔵野音楽大学、同大学附属高等学校、及び同大学附属人間音楽教室、柴田音楽教室において後進の指導に当たる。

*Asumi Nakamura*  
*Piano Recital*

仲村 亜寿実  
ピアノ・リサイタル  
*Asumi Nakamura*  
*Piano Recital*

2013

6/15

18時30分 開場  
19時 開演

Hakuju Hall (白寿ホール)

【後援】グループ「萌」

## Program Note

### ●Ludwig van Beethoven: “Andante favori” F dur WoO 57

《アンダンテ・ファヴォリ》は、元々ピアノ・ソナタ第21番《ヴァルトシュタイン》作品53の第2楽章として、1803-04年に作曲された。しかし、そのピアノ・ソナタ第21番があまりに長大だという友人の批判を受け、第2楽章をソナタから外した。その結果、このように第2楽章だけが個別に出版されたのである。ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)自身がこの曲を気に入り、好んで演奏したと伝えられている。

### ●Ludwig van Beethoven: Klaviersonate Nr.30 E dur Op.109

ピアノ・ソナタの歴史において画期的な作品と言えるピアノ・ソナタ第29番《ハンマークラヴィーア》作品106の後に、ベートーヴェンは、32曲から成るピアノ・ソナタのシリーズを締めくくる3つのソナタを作曲した。後期のソナタには、《ハンマークラヴィーア》のように肥大した規模を持つ作品が存在する一方で、余計なものをすべて削ぎ落としたコンパクトな形式を持つ作品も見られる。そのコンパクトな面が最もよく表された作品こそが、このピアノ・ソナタ第30番であり、1820年頃に成立した。

第1楽章(ホ長調、2/4拍子)は、VivaceとAdagioという2つのテンポによる楽節を「急—緩—急—緩—急」のように交互に配置した構成で、 Rond風のソナタ形式と考えられる。第2楽章(ホ短調、6/8拍子)は、8分音符による細かい動きを含む右手と、重々しくオクターヴで下行する左手による反行的性格を持つ主題に始まり、簡潔なソナタ形式から成る。第3楽章(ホ長調、3/4拍子)は、「属調に向かう前半8小節」と「属調から主調へ帰する後半8小節」から成る主題に始まり、その後6つの変奏が続く。音型的変奏、和声的変奏、対位的変奏など、様々な変奏が繰り広げられ、主題が完全な形で再現され、終結する。

### ●Frédéric François Chopin: “Ballade No.4” f moll Op.52

ショパンの《バラード》は、ポーランドの詩人アダム・ミツキェヴィチ(1798-1855)の詩からインスピレーションを得て作曲されたと言われる。この《バラード第4番》は1842-43年に創作されたが、その頃ショパンは、恩師ヴォイチェフ・ジヴニー(1756-1842)や親友ヤン・マトウシンスキ(1809-42)の死に直面し、精神的に大きな打撃を受けていた。そのような内面の陰影が、この作品には秘められているのであろう。8小節の序奏を持ち、ソナタ形式と変奏曲形式を混合したようなRond風の自由な形式で書かれている。《バラード第4番》と同じ頃には、《ポロネーズ第6番「英雄」》作品53や《スケルツォ第4番》作品54などが創作された。

### ●Robert Schumann:

#### “Carnaval: Scènes mignonnes sur quatre notes” Op.9

ロベルト・シューマン(1810-56)は1834年9月13日、この《謝肉祭》の創作に関して、次のように書いた。

## Program

Ludwig van Beethoven: “Andante favori” F dur WoO 57  
ベートーヴェン: 《アンダンテ・ファヴォリ》へ長調 WoO 57

Ludwig van Beethoven: Klaviersonate Nr.30 E dur Op.109  
ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ 第30番 ホ長調 作品109

第1楽章 Vivace, ma non troppo  
第2楽章 Prestissimo  
第3楽章 Gesangvoll, mit innigster Empfindung  
(Andante molto cantabile ed espressivo)

Frédéric François Chopin: “Ballade No.4” f moll Op.52  
ショパン: 《バラード 第4番》へ短調 作品52

— Intermission —

Robert Schumann: “Carnaval: Scènes mignonnes sur quatre notes” Op.9  
シューマン: 《謝肉祭 4つの音に基づく小景》作品9

- |   |   |
|---|---|
| 1. Prélude 前口上                                    | 12. Chopin ショパン   |
| 2. Pierrot ピエロ                                    | 13. Estrella エストレラ  |
| 3. Arlequin アルルカン                                 | 14. Reconnaissance 再会   |
| 4. Valse noble 高雅なワルツ                             | 15. Pantalon et Colombine<br>パンタロンとコロンビーヌ                                       |
| 5. Eusebius オイゼビウス                                | 16. Valse allemande ドイツ風ワルツ   |
| 6. Florestan フロレスタン                               | 17. Paganini パガニーニ (Intermezzo)   |
| 7. Coquette コケット                                  | 18. Aveu 告白   |
| 8. Réplique 返事<br>— Sphinxes スフィンクス —             | 19. Promenade プロムナード  |
| 9. Papillons 蝶々                                   | 20. Pause 休憩  |
| 10. A.S.C.H. - S.C.H.A. Lettres dansantes<br>踊る文字 | 21. Marche des<br>“Davidsbündler” contre les Philistins<br>ペリシテ人と戦う「ダヴィッド同盟」の行進 |
| 11. Chiarina キアリーナ                                |   |

「A S C Hというのが大変音楽的な町の名前で、私の名前にも含まれていること、しかも私の名前前で音になる文字は、これらの4文字だけだということを今発見したばかりだ。これはメランコリックに響くであろう。——私は作曲に熱中しているところだ。」

シューマンは、フリードリヒ・ヴィーク(1785-1873)に師事していた時期に、同じくヴィークのもとで学んでいたエルネスティーネ・フォン・フリッケン(1816-44)という男爵令嬢に想いを寄せたが、彼女の父親の反対を受け、その恋は実ることなく終わった。そのエルネスティーネの故郷であるポヘミアの地名が、アッシュ(ASCH)であった。この地名「ASCH」からとった4つの音、つまりA-Es-C-H(イ-変ホ-ハ-ロ)の組み合わせによる動機を用いて、シューマンは創作に取り組んだ。序章〈前口上〉と最終章〈ペリシテ人と戦う「ダヴィッド同盟」の行進〉は規模が大きく、その間に性格的小品を配置した曲集となっている。

この《謝肉祭》には、16世紀中頃にイタリアで生まれた即興喜劇「コメディア・デッラルテ Commedia dell'arte」に登場するキャラクター、例えばパンタロンやコロンビーヌなどの幾人かが現れる。「コメディア・デッラルテ」の登場人物はそれぞれ決められた性格や服装を与えられ、仮面を付けて即興的に役を演じる。「コメディア・デッラルテ」は、現在でもヨーロッパ各地で上演され続けているという。

初演は1840年3月30日、ライプツィヒにてフランツ・リスト(1811-86)により行われ、その際第1、5、6、7、8、12、15、14、19、21曲のみが演奏された(曲目は、演奏順に記載した)。

1. 前口上(Quasi maestoso -Presto 変イ長調 3/4拍子):交響的な響きの輝かしい和音に始まり、謝肉祭の開幕にふさわしい荘重さと華麗さを演出した見事な雰囲気描写となっている。
2. ピエロ(Moderato 変ホ長調 2/4拍子):ピエロは「コメディア・デッラルテ」に登場するペドロリーノに由来する。ペドロリーノとは、白いマスクを被った夢想家で繊細な性格を持つ人物である。ピエロ(ペドロリーノ)の仕草が巧妙に描写される。
3. アルルカン(Vivo 変ロ長調 3/4拍子):アルルカンは「コメディア・デッラルテ」に登場する人物で、動きが機敏で、様々な機転が効く道化師を指す。巧妙な音の動きと機知の効いたリズムにより、アルルカンの滑稽な踊りを表現していると言える。
4. 高雅なワルツ(Un poco maestoso 変ロ長調 3/4拍子):ノスタルジックな側面を持つ優雅な小舞曲。謝肉祭での踊りの情景が描写される。
5. オイゼビウス(Adagio 変ホ長調 2/4拍子):オイゼビウスはシューマンの分身であり、瞑想的で内省的な性格を持つ。7連符と2/4拍子の交錯が大変特徴的である。
6. フロレスタン(Passionato 短調 3/4拍子):オイゼビウスに続き、もう1人のシューマンの分身であるフロレスタンは明朗で、精力的な性格を持つ。第2、3拍目に頻繁にアクセントが置かれ、独特なエネルギーを感じさせる。
7. コケット(Vivo 変ロ長調 3/4拍子):曲全体は、休符を挟んだ装飾音風リズム動機により支配される。男に巧みに媚びを売る色っぽい女性を描写している。

8. 返事(Listesso tempo 変ロ長調 3/4拍子):〈コケット〉の序奏部分を利用し、コケットに返答を行う。この後〈スフィンクス〉において、4つまたは3つの音符による音列3種(Es-C-H-A、As-C-H、A-Es-C-H)が示される。

9. 蝶々(Prestissimo 変ロ長調 2/4拍子):シューマンの《パピヨン》作品2との関連は無く、蝶々が活発に舞う様子が思い浮かべられる。

10. 踊る文字(Presto 変ホ長調 3/4拍子):As音とH音が前打音となって、音符化した4文字が踊り出す。

11. キアリーナ(Passionato ハ短調 3/4拍子):キアリーナとは、「ダヴィッド同盟」でのクララの名前である。「ダヴィッド同盟」とはシューマンが考え出した架空の団体であり、保守的な考えに固執した古い芸術を打ち破るために戦う音楽家たち、例えばオイゼビウス、フロレスタン、メンデルスゾーン、そしてクララなどが属する。クララの様子が力強く、また愛らしいイメージで描かれている。

12. ショパン(Agitato 変イ長調 6/4拍子):ショパンの書法を模倣したもので、ノクターン風の旋律が描かれる。

13. エストレラ(Con affetto ハ短調 3/4拍子):エストレラとは、エルネスティーネ・フォン・フリッケンをもじったもの。彼女への想いが非常に情熱的に表現されている。

14. 再会(Animato 変イ長調 2/4拍子):謝肉祭の期間中には仮面舞踏会が行われ、後に再開した時に「あれは、あの晩のピエロさん!？」などと相手の姿に気づき、思い出し合う情景が想像されよう。

15. パンタロンとコロンビーヌ(Presto ハ短調 2/4拍子):この2人の人物は「コメディア・デッラルテ」に登場する。パンタロンは、お金持ちで欲深く、性欲旺盛な男性の老商人を指す。一方コロンビーヌは、無学であるが生まれながらの知恵を持っており、肉体的魅力で周囲を惹きつける女性を指す。2人がかけ合ったり寄り添ったりする様子が、音型的な動きとスタッカートとアクセントの巧妙な組み合わせにより描かれる。

16. ドイツ風ワルツ(Molto vivace 変イ長調 3/4拍子):優雅な趣を持つワルツ音楽である。

17. パガニーニ(Presto ハ短調 2/4拍子):冒頭にIntermezzoと表記があり、この〈パガニーニ〉の後(ドイツ風ワルツ)が再現される。多くの跳躍進行から成るヴァイオリン風のパスセージがピアノに描写される。

18. 告白(Passionato 変イ長調 2/4拍子):冒頭にPassionatoと表記があるが、曲想は極めて穏やかで内向的である。心の内に秘めた情熱的な想いを表現したとも言えようか。

19. プロムナード(Commodo 変ニ長調 3/4拍子):告白の後、2人で散歩を楽しむかのようなイメージを思い起こさせる優美なワルツである。

20. 休憩(Vivo 変イ長調 3/4拍子):踊り疲れた人々の休息を描写したようであるが、この短い27小節間からは、本来の意味での休息は全く感じられない。〈前口上〉での一節を用いて、勢いに乗って終曲へとなだれ込む。

21. ペリシテ人と戦う「ダヴィッド同盟」の行進(Non Allegro-Molto più vivo 変イ長調 3/4拍子):旧約聖書に現われる異教徒ペリシテ人(シューマンの芸術観に賛成せず、上っ面だけの空虚な音楽を目指す人々のたとえ)を、シューマンの芸術仲間であるダヴィッド同盟員が打ち倒して、堂々と行進する様子が描かれる。Molto più vivo以降では、シューマンの《パピヨン》作品2の終曲で使用された17世紀の民謡である「祖父の踊り」の旋律や、〈前口上〉で使用された楽想が登場する。最終的には、再び〈前口上〉の終結部が規模を拡大して登場し、変イ長調の主和音が繰り返し鳴らされ、輝かしく終わる。〈前口上〉とこの終曲において、互いに共通した音楽素材を使用することにより、楽曲全体に統一感が与えられている。